

北陵らいぶらりい

6月号

令和元年7月2日 札幌北陵高校図書館発行

6月も終わりが近づき、本州の方では例年よりは1週間ほど遅いようですが、ついに梅雨が始まったようです。「北海道には梅雨はない」なんて言われますが、最近は雨が降る日が多く、暗い天気の日が増えてきましたね。

今月は、そんな暗いじめじめした気分も吹き飛ばせるような明るく、綺麗な景色の本を集めたコーナーを図書室に設置しています！ぜひ読んでみてください。



輝かしき高校野球

先日、北陵高校野球部が怒涛の快進撃を続けていたことは、皆さんの記憶にも新しいと思います。私も、スタンドから声が枯れるほど応援したのを覚えています。試合終了後には言葉にすることのできない感動を覚えました。皆さんの中にはもしかすると涙を流した人もいないでしょうか...

惜しくも、夏の大会では敗れてしまいましたが、最高の感動を私たちにありがとうございました。そして、3年生の皆さんお疲れ様でした！

文責：阿部

部活や勉強で忙しいと他のことに時間を当てるのは大変ですが何かを始めてみたいと思った時に、私が興味を持った趣味について紹介します。

《日記》今、実際にやっているという人も多いと思いますが、自分と向き合う時間を作ったり、綺麗な文字を書く練習になったり、文章力が向上するメリットがあります。

《DIY》Do It Yourselfの略で、日常生活で使うありとあらゆる者を自らの手で作る、もしくは修繕する趣味です。テーブルやイスから始めるのがいいそうです。 文責：種田

趣味について

一人称「俺」について

皆さんは自分のことを「俺」という女性をどう思いますか？皆さんの何人かは、そのような人たちに対して受け入れられない気持ちを持っているのかもしれませんが...

しかし、中世のころまで、「おれ」という言葉は二人称として用いられていたそうです。当初は男女の違いもなく使われていましたが、江戸時代末期から男性の言葉になったと言われています。そのため、今と昔で意味が少し変わってしまった言葉も、私たちは知らずに使っているかもしれません。興味のある方は調べてみてください。 文責：藤本

古本市について

図書館では、北陵祭3日目の**7月7日**にて今年も古本市を開催します。時間は**9:30~13:10**、開催場所は**3階図書室**です！買っていただけた方には右のコンパクトで使いやすい図書館オリジナルのしおりをプレゼントします！ぜひ来てください！！

このように端にはめて使います！→



局員が選んだ

今月のオススメ本紹介

この時期に読むのにぴったりな本を図書局員が選びました！

『遠野物語 remix 京極夏彦x 柳田國男』 著者 京極夏彦・柳田國男 出版 角川ソフィア文庫

明治時代の民俗学者、柳田國男が、遠野出身の民話収集家である、佐々木喜善から聞いた民話を忠実に筆記した書物。不思議な事や理解出来ない事があると、それを「妖怪」に当てはめて理解をしていたような時代。そんな時代の体験談をまとめた一冊、それが『遠野物語』。

本書は、それを京極夏彦が意識、アレンジを加え、現代語訳したものにになります。

色んなところで色んな人が体験したお話なので、普段皆さんが聞くような怪談と違って、オチはないんです。それがまた怖い。夏が始まるこの季節、納涼に一読、如何でしょうか。 文責：伏木田



『リアルフェイス』著者 知念実希人 出版 実業之日本社文庫

金さえ払えれば、どんな人の依頼も受ける天才美容外科医、柊貴之。そんな彼のもとには奇妙な依頼が多くやってくる。妻の顔を変えてほしい、ある男の顔を別の人にしてほしいなど。麻酔科医の朝霧明日香は彼のもとで働くことになって...

(『改貌屋 天才美容外科医 柊貴之の事件カルテ』を改題・改稿)

文責：小原

『マリオネットの罠』著者 赤川次郎 出版 文春文庫

私はガラスの人形と呼ばれていた――。

森の館に幽閉された美少女、都会の空白に起こる連続殺人事件。錯綜する人間の欲望を鮮やかに描いた本作は世界観が暗く、不気味である。

赤川次郎の作品はコミカルでテンポがよく、難解度は低めという印象を持つ人も少なくないのではないか。だが、本作では頭を使って謎解きをしなくては少々難しい内容なのではと思う。ミステリー好きには楽しめる作品と言えるだろう。それでも読みやすいので小説の苦手な方でも気軽に読めると思う。ぜひ手に取って頂きたい。 文責：田中



『青春スタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない』著者 鴨志田一 出版 電撃文庫



自分、そして家族に起きた不可解な事件で他人と壁を置いている高校生、梓川咲田。彼はあるひとりのバニーガールに出会い、日常が果てしない非日常へと変わっていく...

これは、絶対ありえるはずのなかった、退屈万歳の青春ブタ野郎と元女優、そして野生のバニーガールのひとつの存在を巡る青春...かもしれない物語。 文責：山田

裏面もあります！ →

先生にインタビュー！

2回目となる今回は、図書室の担当をしてくださっている上村先生にお話を聞かせてもらいました！

Q1. どのような学校生活を送っていましたか？

A. 特に部活動には入っていなかったので、のんびりマイペースで趣味の時間を大切に過ごしていました。英語がその当時から好きだったので、英語の予習復習の時間だけは毎日頑張っていました。

Q2. 学生時代はどのような本を読んでいたか？

A. 小説が好きで、女性作家のものをよく読んでいました。
吉本ばなな、山田詠美が好きでした。
好きになった作家のものは全て読むことを目標としていました。

Q3. オススメの本を教えてください！

A. 『脳が認める勉強法』ベネディクト・チャリー著、花塚恵翻訳
第一線の科学者への取材をもとに、学習効率を上げる最新の記憶法・勉強法について考察しています。「静かな環境で勉強するのは非効率」「同じ時間に同じ場所で勉強すべきではない」など、今まで常識とされていたことに対して脳科学の視点から疑問を投げかけているため、驚きもあり非常に興味深かったです。

Q4. 最後に一言メッセージをお願いします！

A. あわただしい時間の中でも、自分の好きな本に触れたり、美しい写真を見ることで心が落ち着き、自分だけの空間や時間を過ごすことができます。新しい知識に触れることも新たな感動を得ることも一冊の本があれば出来ます。本の魅力ってすごいなあと思います。たくさんの本に触れて感性を磨きましょう😊

上村先生、ありがとうございました！！
来月号では、水谷先生に話を伺います。お楽しみに！

『紫陽花』

六月といえば紫陽花！という訳で、今回は紫陽花について紹介しようと思います。

紫陽花は六月から七月にかけて開花し、白、青、紫または赤色の萼（がく）が大きく発達した装飾花をもちます。ガクアジサイではこれが花序の周辺部を縁取るように並び、園芸では「額咲き」と呼ばれています。ガクアジサイから変化して、花序が球形ですべて装飾花となったアジサイは、「手まり咲き」と呼ばれます。日本、ヨーロッパ、アメリカなどで観賞用に広く栽培され、多くの品種が作り出されています。原産地は日本で、ヨーロッパで品種改良されたものはセイヨウアジサイと呼ばれます。なお、後述の通り本種は有毒植物であるため、園芸や切り花として利用する際には取り扱いに注意が必要です。花言葉は「辛抱強い愛情」「一家団欒」「家族の結びつき」などがあります。

如何だったでしょうか？紫陽花のあの綺麗な花びらだと思っていたものは、実は花びらではなく花弁だったり、あんなに綺麗なのに毒を持っていたりと、紫陽花はとても面白い花でした。

今度見かけたらじっくり観察してみたいかがでしょうか？ 文責：楢山

ほんめぐっ!!

ほんめぐっ!!とは本に登場する、
実在する色々な場所を巡ろう！
という企画です！

～ 鎌倉編 『ビブリア古書堂の事件手帖』 ～ 『やはり俺の青春ラブコメは間違っている』

京都、奈良と並んで有名な古都・鎌倉。

数多くの小説家達が物語の舞台としてきた鎌倉はその小説家の数だけ様々な描写がされ、小説ごとに色々な景色を見せてくれます。

今回はその鎌倉と周辺の地域について、そこを舞台としている小説と共に紹介していきたいと思います。

鎌倉は武士の町として作られ、栄えました。

『ビブリア古書堂の事件手帖』という小説の序盤にこのような一文があります。『道が狭い上に三方を山に囲まれた鎌倉は、場所によってはびっくりするほど交通の便が悪い』

鎌倉は山と海に囲まれた天然の要塞とも呼べるような立地です。さらに、道や土地の分け方などを複雑にすることで、例え攻められたとしても將軍のいる場所までは簡単には行けないようにしました。現代でもこのような複雑な町並みは残っていて観光客を悩ませます。

また、鎌倉は物語の舞台としてよく登場しますが、少し変わった関わり方をする小説もあります。『やはり俺の青春ラブコメは間違っている』というライトノベルの主人公やヒロインの姓名は鎌倉やその周辺の地名からとられていることで有名です。ヒロインや主人公の親友の名字は「雪ノ下」や「由ヶ浜」「材木座」など鎌倉の地名。主人公の名前は「比企谷 八幡」と一見関係なさそうにも見えますが、鎌倉の鶴岡八幡宮から名前がとられています。

鎌倉から僕達を江ノ島まで運んでくれる「江ノ島電鉄」も鎌倉観光の魅力の一つでしょう。江ノ電は日本有数の私鉄の一つであり、交通の便が悪い鎌倉での移動を助けてくれる味方の一人でもあります。その江ノ電ですが、他の路線では信じられないほどに線路と住宅街の距離が近いことで有名です。江ノ電の特徴的なカラーリングの車両が、鎌倉の古き良き町並みを縫うようにして走って行くその姿は、撮り鉄達の間でも恰好の被写体となっています。

鎌倉は都心から約一時間という距離にありながら、神秘的な雰囲気漂わせる素晴らしい都市です。作家達もそのスピリチュアルな空気に惹かれて、舞台をそこにキャラクター達を動かしていくのでしょ。鎌倉に赴く際には、ぜひ小説をお供にその舞台を訪ねてみてはいかがでしょう？
文責 堀

